

## 第4章 調査成果

五色塚古墳の発掘調査は、第3章で詳述したとおり1965年から1974年まで、10年の歳月をかけ発掘調査が実施された。その結果、それまで明らかではなかった大型前方後円墳の墳丘構造、葺石、埴輪列などについて様々な知見が得られていた。しかし、その成果についての報告は、「史跡五色塚古墳環境整備事業 中間報告」(神戸市教育委員会 1970、以下「中間報告」と略す)と「史跡五色塚古墳復元・整備事業概要」(神戸市教育委員会 1982年、以下「概要」と略す)の刊行にとどまっていたため、詳細な内容が公にされていなかった。今回実測図面の接合が初めて完成し、これまでに公にされていない内容もここに掲載することができた。また、「中間報告」「概要」に記載されている内容で、現在確認がとれない記述は、その内容を再掲した。しかし、調査後30年を経た今、改めて実測図面などを検討すると、恣意的な解釈がなされているのではないかと思われるものが存在し、執筆者の独断ではあるが、混乱を避けるためすべてを正報告の原稿にすることができたことを、断っておきたい。

本章で使用する墳丘各部の名称は、「中間報告」「概要」の用語を出来る限り踏襲したが、今日の用法と異なるものは呼び換え、以下のようにした。

墳丘は三段に築造されているので、下から下段、中段、上段とし、各段の間に設けられた平坦面はテラス、下段と中段の間のテラスは中段テラス、中段と上段の間のテラスは上段テラス、上段の上は墳頂とした。各段の斜面には葺石が葺かれており、テラスと斜面の境には、斜面に葺かれた石より大き目の礫が据えられているが、それは基底石とした。東側くびれ部から後円部にかけて、下段基底石の下に更に斜面がつくられ、礫が葺かれている部分が存在した。この部分については最下段とした。墳丘周囲に巡らされた濠は周濠とし、その外に巡ることが後に確認された溝は、周濠に比べ規模が小さいことから周溝とした。

埴輪に関しては、埴輪樹立の際の掘形は断面方形の溝状で、発掘調査中から「埴輪溝」と呼び習わされてきた。しかし、溝という表現は誤解を招く恐れもあり、本章では「埴輪掘形」と呼び換えた。

周濠中に存在する方形の土壙を、「概要」などで「マウンド」と呼称してきたが、本書では「島状造構」としたが、既に固有名詞化している造構は従来通りとした。

### 1. 墳丘

五色塚古墳および小壺古墳の規模については、「中間報告」「概要」に掲載されている数値とは若干異なる。五色塚古墳は、墳丘長194mの前方後円墳で、3段に築かれている。各段の斜面には葺石が葺かれ、墳頂と各段のテラスには埴輪が樹立され、墳丘の周囲には濠が巡らされている。

小壺古墳は、「概要」では直径67mの円墳とされているが、今回の実測図面で検討した結果、東トレンチで唯一墳丘裾が検出されており、その部分で復元すると直径70mであることが判明した。2段に築かれた墳丘の斜面には葺石は葺かれず、墳頂と下段テラスには

埴輪が巡らされていた。下段テラスの埴輪列は、墳丘中心から半径22.5m付近で巡っていることから、上段の直径は43m前後に復元できる。円墳としては兵庫県下最大であったが、2002年8月に朝来町（現朝来市）で発掘調査された茶すり山古墳が、直径86mであったため、現在では兵庫県下で二番目の規模になった。

五色塚古墳および小壺古墳の、墳丘各部分の規模は下表の通りである。計測値は、手書きや写真測量で1/10ないしは1/20に図化された各部分の図面を接合し、1/100に縮小したものから導き出した。括弧内の数値は、資料不足でやや信頼性に欠けるものである（図4-1）。

五色塚古墳					小壺古墳	
	全長	後円部径	くびれ部幅	前方部幅		直径
上段	150.5m	72.2m	19.0m	33.5m		43m
中段	171.0m	100.0m	37.0m	53.7m		
下段	194.0m	125.5m	65.2m	(82.4m)		70m

なお、五色塚古墳の前方部墳頂の長さ（後円部上段基底石列から、前方部上段先端の復元線まで）は71.5m、南端幅18.0m、北端幅9m、後円部墳頂平坦面の直径は30mである。また、小壺古墳の墳頂平坦面の直径は16mである。

墳丘の高さについては、計測基準地点の設定場所でその数値は異なるが、東側くびれ部濠底の標高14.5mを基準にすれば、後円部の高さ18.8m、前方部先端の高さは13.0mを計る。小壺古墳の高さはおよそ8.5mである。以上の墳丘各部分の高さは、復元（推定）値である。

古墳築造に際し、地山をどのように削り出し、どのように盛土が行われたかの追求は、古墳の発掘調査において基本的な作業の一つであるが、五色塚古墳では葺石・埴輪など外郭施設の調査に重点がおかれたため、また復元整備に伴う発掘調査であることから、墳丘を破壊するトレンチによる断ち割り調査は最小限に止められた。したがって、墳丘盛土の状態についての資料は十分とはいえない。

墳丘内地山面の高さおよび盛土状況の調査のための断ち割りは、前方部のS6・S10トレンチ、後円部のN・Wく・Eくトレンチ、合わせて5か所で実施されたが、いずれも断ち割り部分は中段テラスから上段斜面にかけてである。したがって五色塚古墳で一番長い斜面をもつ、後円部上段の盛土については全く調査していない（図4-2）。

墳丘内地山の高さは後円部北側で標高22m、西側くびれ部で20.9m、東側くびれ部で20.5m、前方部西側S6トレンチで20.6m、前方部東側S10トレンチで19.4mであった。北から南へ緩やかに傾斜していることがわかる。

付図2は、1950年代に作成された地形図で、大きく地形が改変されている部分は少ないと考えられる。前方部南面は海岸まで段丘面がのびており、断崖になり、海浜になっていたようであるが、南西には深い谷筋が開口しており、着船可能な地形であると考えられる。この地形図から周濠を隔てた五色塚古墳周辺の地山と考えられる高さを計測すると、Nトレンチ延長線上は23~24m前後、NWトレンチ延長線上で約21m、西側くびれ部付近で約19m、前方部西側S6ライン延長線上で18~19m、NEトレンチ延長線上で22~23m、Eトレンチ延長上で約21m、東側くびれ部付近で約18m、前方部S10ライン延長線上で約16m、前方部の南側を通る山陽電車の南側の島状に残されている部分の最高所で約18mを計ること

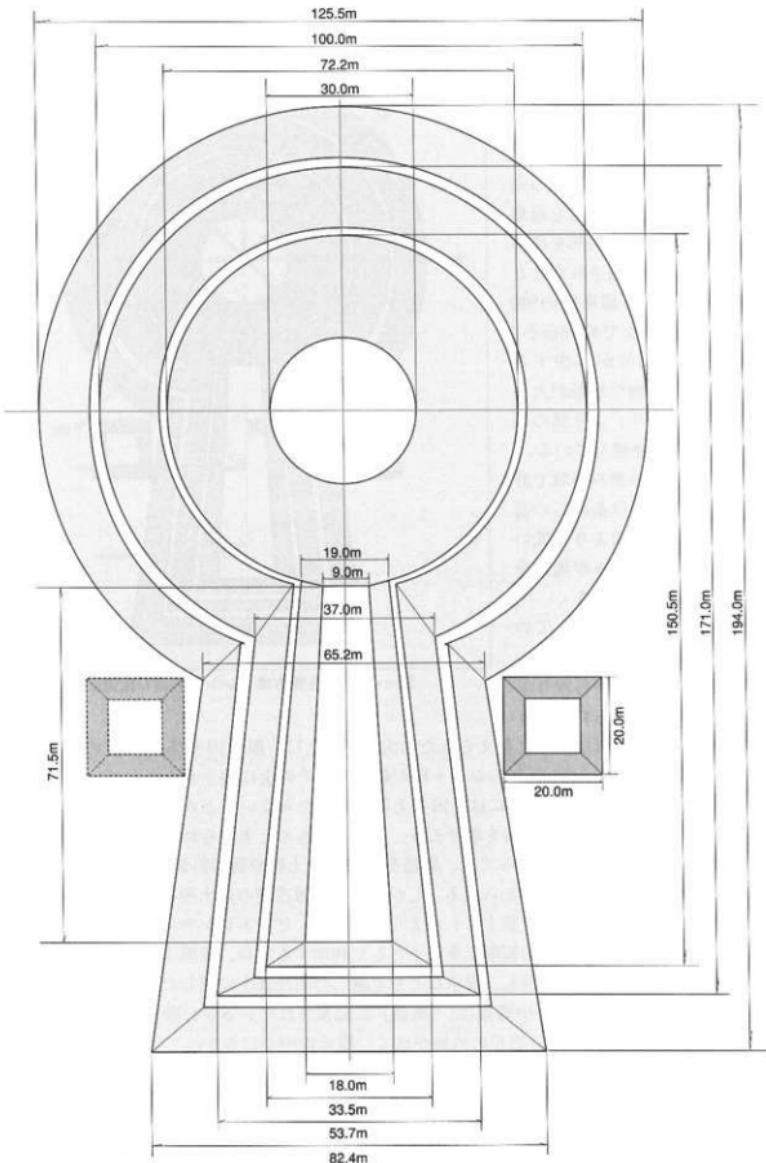


図4-1 五色塚古墳埴丘規模模式図

とができる。

この墳丘地山面の高さと、周辺地形の高さから、ただちに古墳築造時の地形を復元することはできないが、北から南へゆるやかな傾斜をもった台地を利用し、前方部を地形の低い南側に、後円部を高い北側に向けて築造されたことがわかる。前方部東側のS10ライン延長線上で約16mと、一段と低い部分が存在するが、その東と南へ地形が大きく傾斜しており、より東の福田川の谷へと連続している。

また、後述の葺石の項で詳細を記すが、中段基底石の高さをみると地山面よりも低いことから、下段のみが地山を利用しているのではなく、中段の一部も地山を利用していることがわかる。

墳丘に設定した断ち割りトレンチの断面図から判断でき

る盛土の状態は、ほぼ水平に整えられた地山面の直上に、厚さ10~15cm前後の焼土や灰を含むと考えられる(青)灰色のシルト層が敷かれ、その上に盛土がなされている。地山面と(青)灰色のシルト層の間には、旧表土層は見あたらないことから、盛土実施前に地山表面の土壤化した軟弱な地層を取り去り、整地したものと考えられる。

一般的に古墳の築造にあたっては、周濠を掘削した土砂や周濠外側を鋤きとった土を、そのまま盛土に利用したと考えられる。しかし、五色塚古墳の盛土層の断面観察では、地山を掘削した土砂をそのまま盛土にしたような土層は、どのトレンチにおいても認められていない。したがって、地山掘削土を盛土として利用する場合、掘削土と砾や砂を経験則から導き出された割合で混合し、排水などを考慮した墳丘盛土に適したものにしてから使用したものと考えられる(「中間報告」「概要」に記載されているが、断面図からは判断不可能である)。また、盛土は墳丘の外側が高く、墳丘の中心にむかって低くなるような形でなされていた(図4-3)。

なお、墳丘各部の高さについては、基底石列の標高を図4-4に示しておいた。この図からみると、古墳築造は平面形のみでなく立面形についても精度の高い測量技術で施工されたことが解る。

小壇古墳については、墳丘の断ち割り調査を実施していないので、地山と盛土の関係は

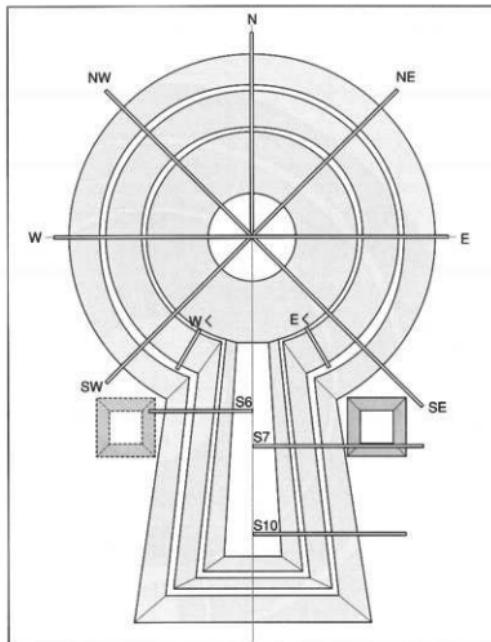
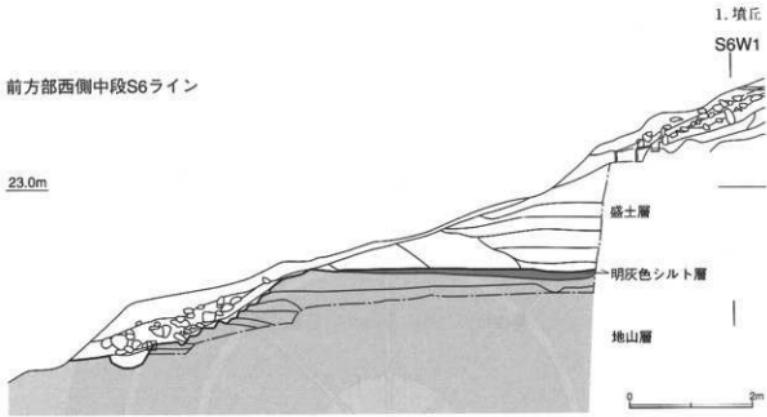
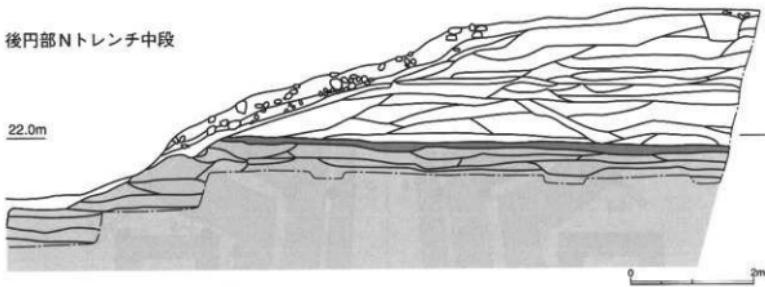


図4-2 五色塚古墳トレンチ名及び配図

前方部西側中段S6ライン



後円部Nトレンチ中段



西側くびれ部トレンチ中段

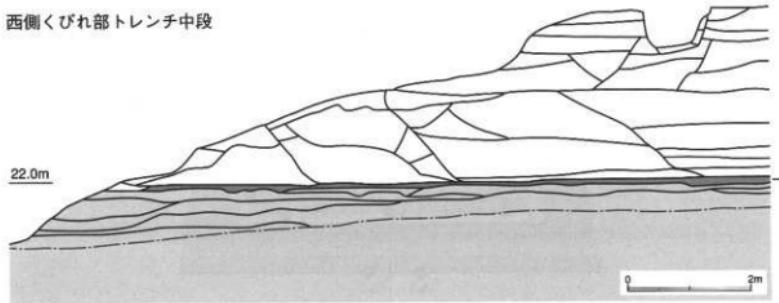


図4-3 前方部及び後円部中段土層断面図

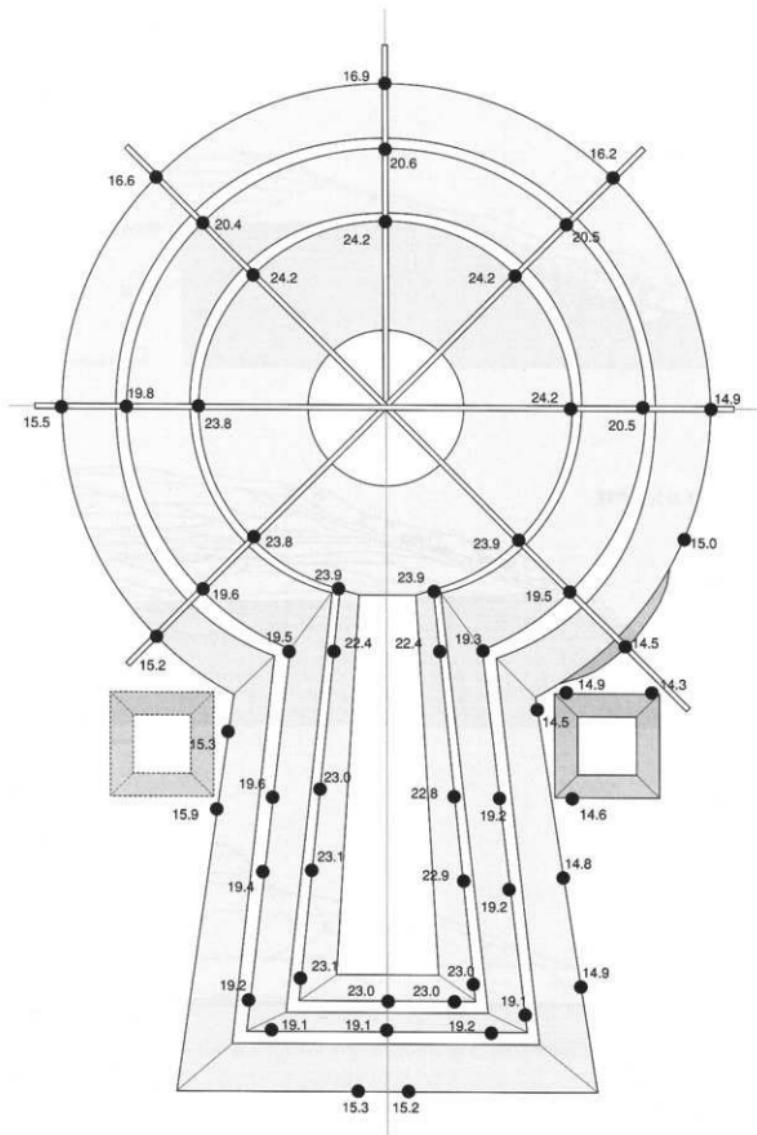


図4-4 墳丘各部基底石列標高値

不明であるが、周辺の地山の高さからみて、18~19m前後の地山を利用して築かれていると推定される。しかし、Nトレンチで検出された中段埴輪列・テラスは21m前後の高さで巡らされているようであることから、大部分が盛土であろうと推測される。

## 2. 舟石

3段に築かれた墳丘の斜面には石が葺きあげられているが、上・中段に使用されている石は径15~30cm程度の円礫であり、下段は径5~10cm程度である。上・中段に使用されている石材は、第7章の先山徹の報告に詳しいが、斑禿岩を主体とし、花崗岩を伴う。少量の凝灰岩類や安山岩、チャートなども含まれている。下段の石材は、今回調査対象としていないが、古生層系のチャート、珪石などが最も多く、若干の砂岩、流紋岩、花崗岩系の礫や稀に社化木の礫も含まれている。

上・中段の舟石の产地については、地質学的には淡路島北東岸が有力である。『日本書紀』神功撰政元年春二月の条に「乃詳為天皇作陵、詣播磨興山陵於赤石。仍幅船組丁淡路鷲、運其鷲石而造之」とあり、古くから五色塚古墳に関する伝承であろうとされてきた。

今回の調査で、舟石が淡路島に産出ものであることが有力となり、日本書紀の伝承を裏付ける調査結果となった。

下段に使用されている礫の組成は、垂水礫層中の礫の組成と一致する。したがって下段の舟石は、付近の海岸や河川で採取した礫を使用したか、あるいは周濠の掘削にあたってあらわされた礫層から、適当な大きさの礫を採取し、舟石として使用されたのではないかと推測される。

五色塚古墳全体に使用されている舟石の量を推定するために、数地点において1m<sup>2</sup>当たりの舟石の個数と重量を計測した。その結果、上・中段では1m<sup>2</sup>当たりの舟石数平均70個、重量は約220kg、下段では1m<sup>2</sup>当たり舟石数平均240個、重量約80kgであり、古墳全体では2,233,500個、2,784トンに達することが計算上明らかになった。墳丘各部の舟石推定個数および重量は下表の通りである。

	前方部			後円部		
	上段	中段	下段	上段	中段	下段
個数	106,800	136,500	696,000	276,500	195,000	822,700
重量(t)	366	429	232	869	614	274

舟石の直下には、小礫を混ぜあわせた砂質土が厚さ10~20cm敷きつめられている。また、上・中段では盛土や地山を階段状に整形し、その上に小礫混りの土をおき、その上に石を葺きあげているところもある。これらは、いずれも盛土や舟石のくずれを防ぐための工法と考えられるが、特に小礫混りの砂質土は、雨水をできるだけ表面に近いところで処理しようとするための施設であろう。

以上は、「中間報告」「概要」に基づいての記述である。サンプルとした舟石は数十箱残されているが、資料としての詳細が全く残されていない。したがって、現在では検証不能である。また、舟石施工の際、小礫混じりの砂質土を敷き排水を考慮したと考えているが、

雨水が浸透し葺石の下を流れたため、粒子の細かな粘土質が流れ去り、粒子の粗い砂粒や小礫が残された結果とも考えられる。報告書作成に際して、いずれも検証することができなかった。

そのほか、各段の葺石について、特徴的な事項を記しておく。

前方部・後円部とも上段には二列の基底石が置かれていたが、前方部南面のみは基底石が一列であった。二列の基底石は前方部先端で合一し、後円部に近づくにしたがって基底石列間の幅が広くなるとともに、内側の基底石が高くなる。なお、上下2段の基底石間の葺石は傾斜角度がゆるやかになっている（図4-5・6）。

また、上段のくびれ部は、前方部に比して後円部が約1.5m高くなっている、二列の基底石はもちろん、埴輪も傾斜面を上り、後円部に接続している。埴輪列については、その断面と復元図を掲載した（図4-14～16）。

後円部上段では、基底石から0.5～1m斜面をあがった部分に、傾斜が変換する部分があり、その部分より下は傾斜角度が大きく、このことから後円部上段は斜面が「く」の字形に復元されているが、今その詳細は不明であるし、後円部西トレンチでは二列の基底石列が確認されているが、東くびれ部では前方部からきた二列の基底石列が後円部にかかったあたりで合一し、一列になっている（図4-7）ことから、後円部上段斜面の葺石については不明な点が多く残されている。

後円部東側下段では、下段基底石列の下にさらに短い斜面がつくられている部分が検出された。この埴下段とも呼ぶべき傾斜面は、上・中段のものと同じ葺石を葺いているが、基底石らしいものは据えられていなかった。最下段は、くびれ部の東約4m付近からはじまり、約23m下段に沿って造られ、墳丘に直交して、濠を横断するように造られた葺石を持つ高さ約0.5mの傾斜面に接続している（図4-8）。東側くびれ部付近の濠底は最も低く、それを解消するために小規模ながらも斜面を必要としたのであろうし、またその段を解消するために濠底の傾斜面が必要であったと考えられる。しかし、濠底はくびれ部から前方部に行くにしたがい、高さを上げていることから、島状遺構の高さを造るために高く見せるために濠底を下げたと考えられる。

葺石の調査は、その検出・図化に相当の時間と労力を要し、五色塚古墳全調査の中でおそらく70%程度を占めたのではないかと推測されるが、いまその調査で得られた成果を図から読み取ることは困難であった。

区画石列については、前方部は葺石の残存状況が悪く、それを確認できたのは前方部東側下段である（図4-9）。縦方向に4か所で確認できるが、その間隔はそれぞれ2.3m、5.0m、3.5mである。また、横方向の区画石列は確認できない。そのほかには、西側と南側中段でも各1か所が確認できるのみである。

基底石列が1.5～2.0mの間隔で、礫の長軸方向を縦に使用する部分と横に使用する部分が交互に存在する、と記録に残されている。しかし、その場所がいずれかという記録は無く、確認できない。このことについては、報告書刊行後も確認のために手を尽くしたいと考えている。

東側くびれ部下段の基底石列が一直線上に並ばず、ずれているのが確認される（図4-10）。これは、葺石施工が後円部側からと前方部側から行われ、その接続部分がこれにあたると考えられる。辻接を合わせるために、一石を斜めに据えている。

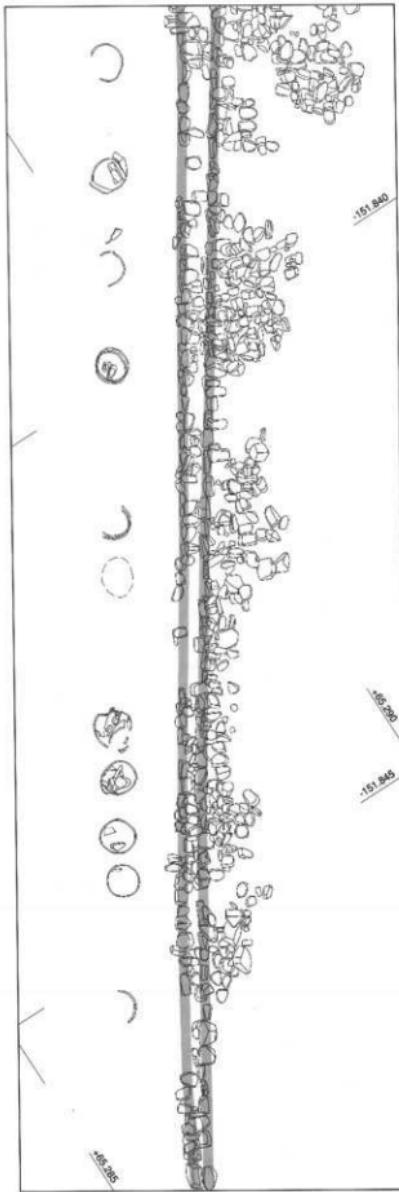


図4-5 前方部西側上段基底石列  
くびれ部から南へ63~75m付近

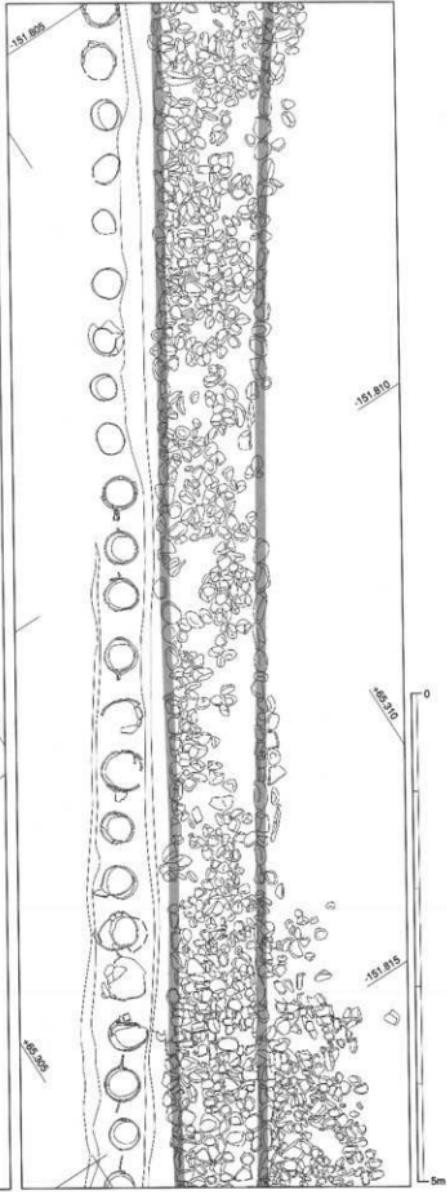


図4-6 前方部西側上段基底石列  
くびれ部から南へ26~38m付近

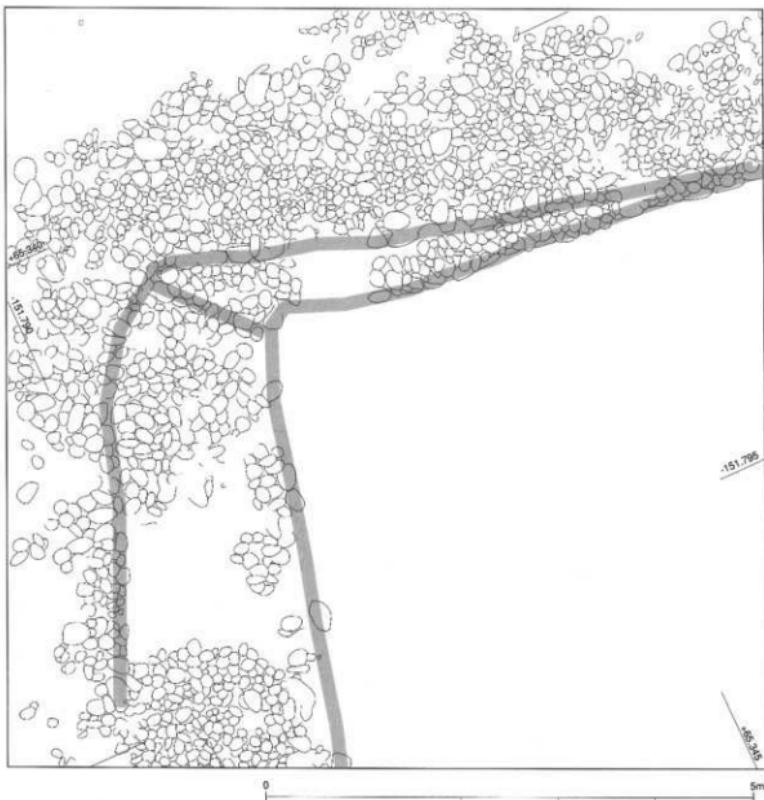


図4-7 東側くびれ部上段の基底石列

西側くびれ部上段では、後円部の基底石列は前方部からきた基底石列に連続して接続するように置かれなければならないが、後円部の円弧のまま前方部葺石の中に置かれている(図4-11、図版26-2・3)。このことは、後円部基底石列が先に置かれ、その後に前方部から葺かれてきた基底石がそこに当たっている状態を示している。すなわち、後円部が先に施工され、その後前方部が施工されたといえる。

以上の他に、暗渠状の遺構が検出されている。五色塚古墳の葺石は円礫を用いて葺かれているが、西側くびれ部下段斜面では板石を小口積みにした部分が存在した(図版34-1～4)。この板石は結晶片岩で、表面のみが葺かれているのではなく、幾層にも重ねられていた。これに続く板石片・砂利・礫が詰められた溝状の遺構は、下段の裾近くまで連続していた。この遺構は、その構造から暗渠排水施設としてつくられたと推定されているが、東側くびれ部においても同様の構造の遺構が検出されている(図版34-5・6)。

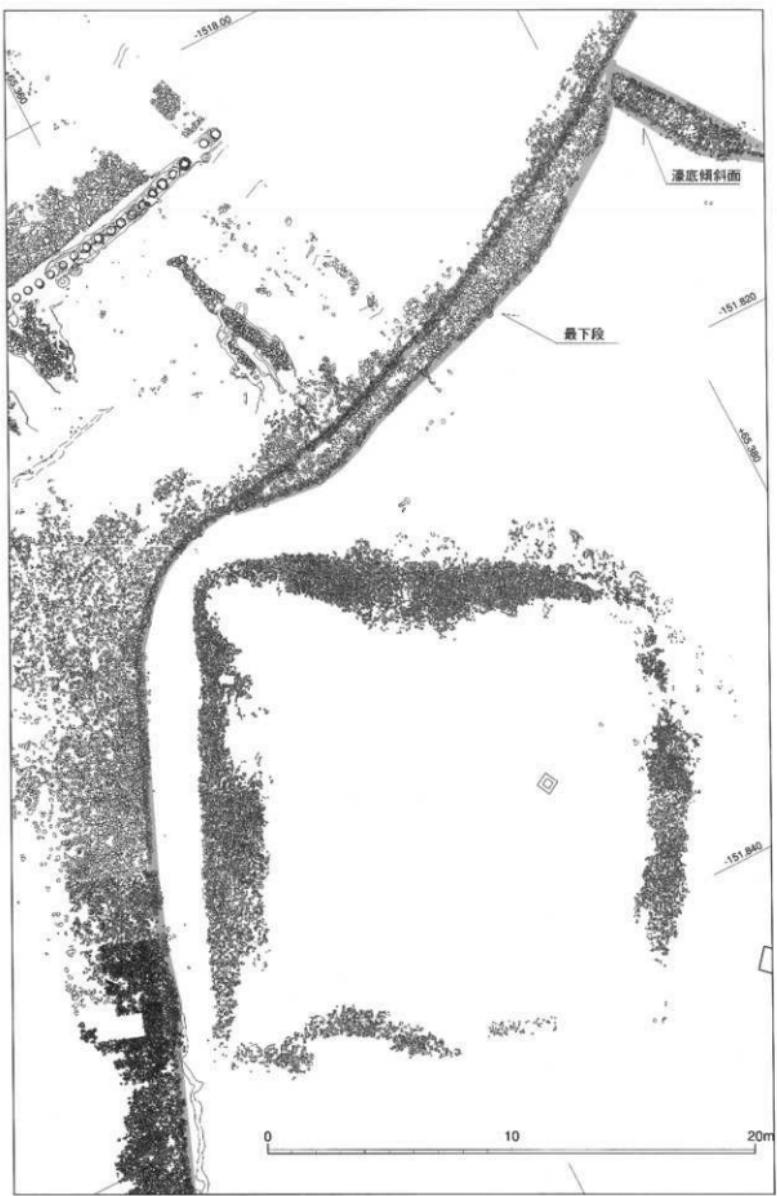


図4-8 東側くびれ部最下段と濠底傾斜面

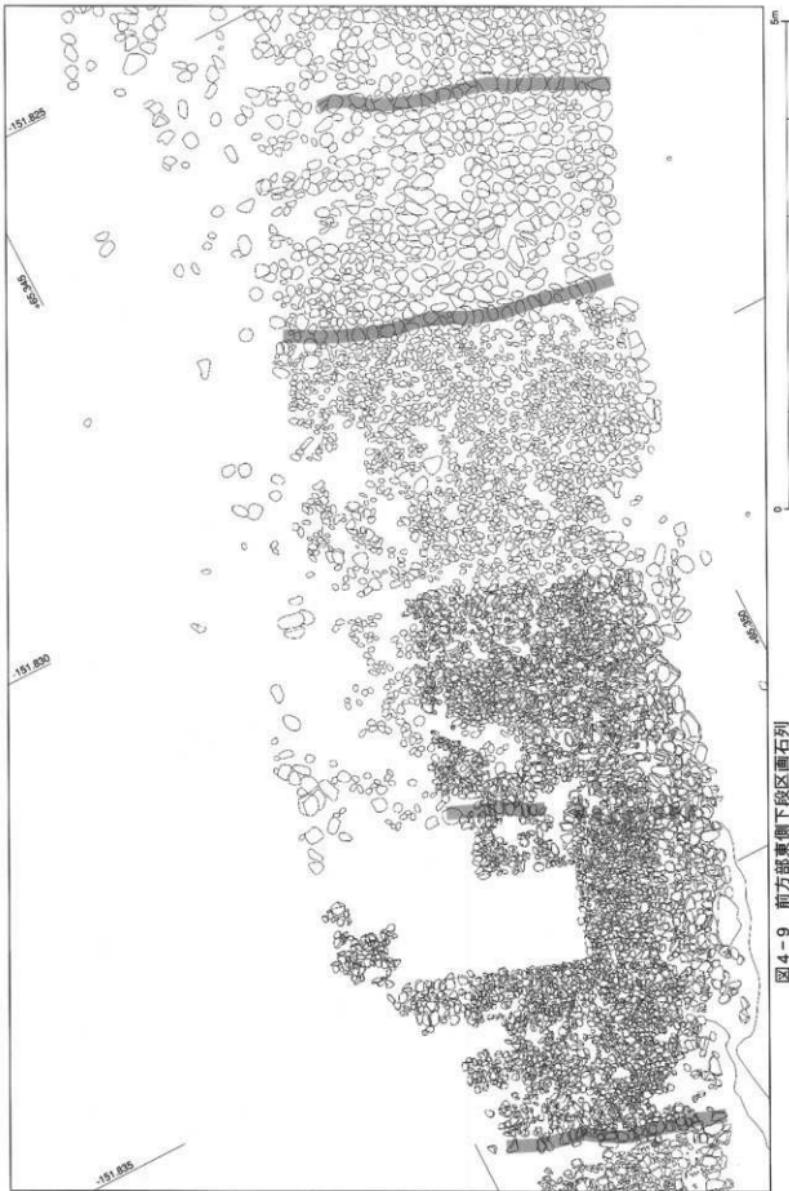


图 4-9 前方部東側下段区画石列



図4-10 東側くびれ部下段基底石列

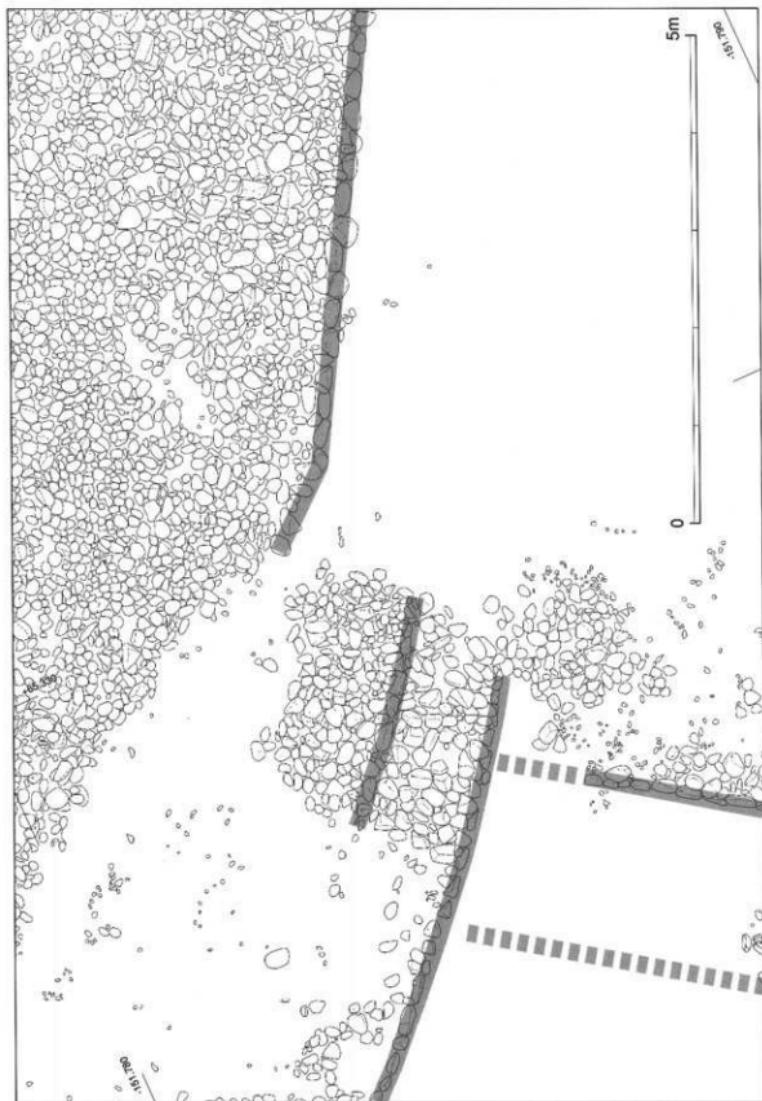


図4-11 西側くびれ部上段・塚頂基底石列

東側くびれ部の葺石の下層から検出された3カ所の暗渠排水施設と推定される遺構は、西側の2基は中段テラスから下段の斜面を少し下った付近までであるが、最も東側のものは、中段テラスの下から下段堀まで続いており、掘形は下方でより広がっていた。これらの遺構は、いずれも掘形内に径15~20cmの礫が充填されており、礫と礫の間から土師器片が出土している。

五色塚古墳では、先述のように葺石下の小礫を混ぜた砂質土が、石を固定させるとともに、墳丘表面の排水を処理するものであったと考えられているのに対し、この東西下段で検出された暗渠排水施設と推定される遺構は、地山を切りこんでつくられており、地山と盛土との間からの湧水を処理するためのものであると推定されている。

### 3. 周濠

周濠の規模や形状については周囲が道路敷であるため調査は不可能であったが、ガス管や水道管の埋設工事に伴い、8か所でトレンチを設定し調査を実施することができた。その結果、現道路下では濠の外側上端は確認できず、道路形状がほぼ築造当時の濠の形状を示すのではないかと考えられた。

前方部南側では、狭小な調査区ではあったが、濠底が幅約4mであることが明らかになり、底面は平坦ではなくU字形に窪んでいた。濠の外側は、電車軌道敷の南側に標高18m程度の高まりが残っているところから、南側にも深い周濠がめぐっていたと推定される。

濠底の高さは、図4-4に基底石列の高さとともにまとめたが、Nトレンチで標高16.9m、Wトレンチで15.5m、西側くびれ部で15.2m、Eトレンチで14.9m、東側くびれ部で14.5m、前方部東側で14.8~14.9m、前方部南側中央付近で15.2~15.3mであった。後円部北側が高く、くびれ部付近が一番低く、また南するにしたがいやや高くなっていることが解る。また、西側よりも東側のほうが0.8~1.0m程度低い。

このようを傾向は、周辺に残されている地山面の高さについても認められる傾向であり、五色塚古墳が地山面の高さに影響されながら築造されていることを示すものであろう。

周濠内の調査は、墳丘から延長されたトレンチのほか、濠内のトレンチも設定して調査を進めたが、その結果いくつかの遺構を検出することができた。

前方部南側の中央部濠底で、下段と周濠の外側を結ぶ通路を思わせるような遺構が検出された(図4-12)。遺構は底辺の幅5.2m、上面の幅2.5m、高さ0.6mで、一旦周濠を掘った後、盛土で造られている。斜面には下段の他の部分と同様に、小礫が葺かれている。また、この遺構の盛土中にはしばしば埴輪片が混入しており、この遺構は墳丘築造後間もなく、少なくとも埴輪が立て並べられた後に築かれたのではないかと推定される。

発掘調査開始前から、東側くびれ部の周濠内に一段高く盛り上がっている部分が存在した。調査の結果、五色塚古墳本体から離れて、独立した島状の遺構であることが確認された。一辺約20m、高さ約1.5mの方形で、斜面には古墳本体に葺かれている礫と同質であるが、更に小さく直径5cm程度の石が葺かれていた。

葺石は基底石を据えずに葺き上げられており、葺石上から埴輪片、須恵器片が出土している。埴輪片が斜面葺石に密着して出土していることからみて、この遺構の頂部に埴輪が樹立されていたと考えられる。なお、遺構の中央部に断ち割りのトレンチを入れて調査を行ったが、埋葬施設は存在せず、すべて盛土であることが明らかになった。この周辺が、

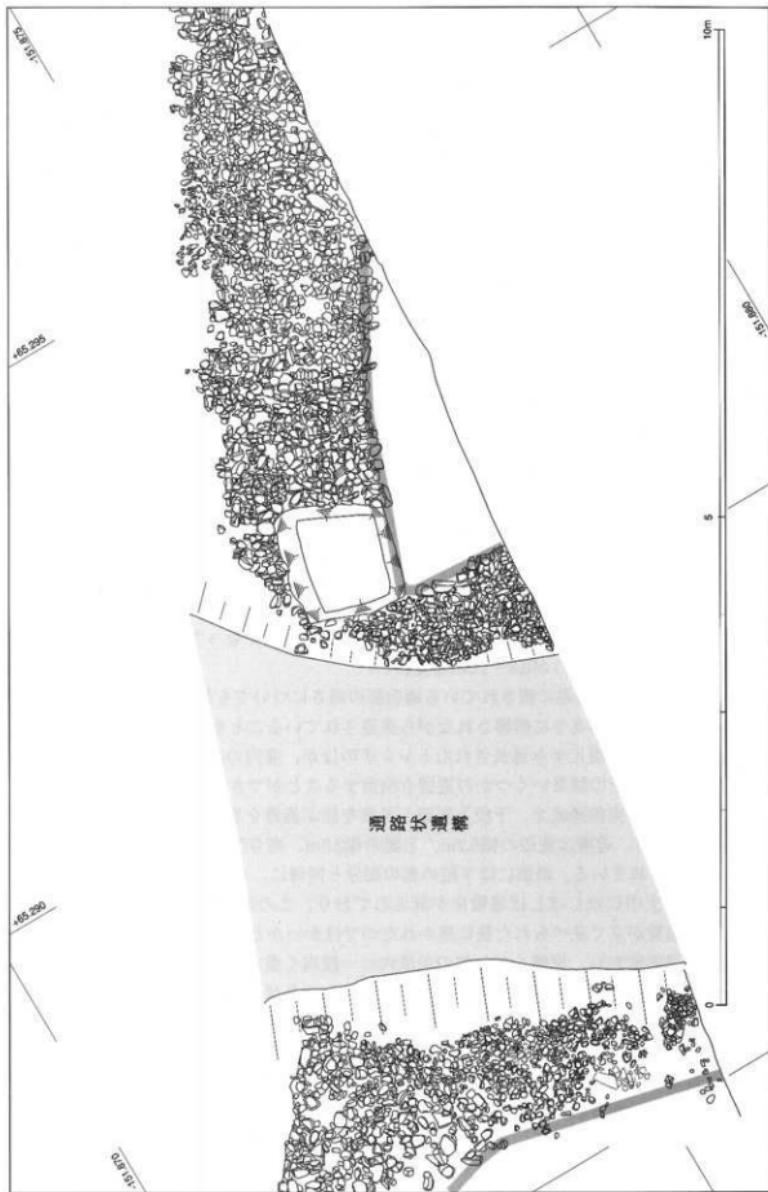


図 4-12 前方韶南側濠中の通路状遺構

濠底の中でも一段と低いことから、この部分を掘削し、盛り上げたとも考えられる。

EトレンチとNEトレンチとの間の周濠内に一段高い部分が存在し、調査前はダム状の造構が存在するのではないかと推定されていたが、トレンチを設定し調査した結果、南北約15.5m、東西の現長8m、高さ1.5~2mの方形に近い造構で、東の道路敷下まで広がっていることが明らかになった。

斜面には径5~10cmの小さな礫を葺き、葺石上から埴輪片が多数出土した。東側くびれ部に存在した島状造構に類似する造構で、ここでも埴輪が樹立されていた可能性がある。この造構と後円部下段との間は斜面の裾が接し、その間に礫を敷きつめ、接続させているようにみえる(図版33-1・2)。

この造構の盛土については、調査当時の観察では、北および南の肩の部分で確認されているだけで、他はすべて地山を掘り残した島状の造構と確定されている。

この島状造構の西斜面で円筒棺が発見された。棺の主軸は五色塚古墳の主軸とほぼ同じ方向で、鰐付円筒埴輪二本を組み合わせて使用していた。棺の全長は1.75m。副葬品として、円筒埴輪の口縁部付近から丸底の土師器壺1点が出土した。なお、この円筒棺の西側に、もう1基円筒棺が確認されたが、発掘調査せず埋め戻し保存した。

以上のはか葺石の項で触れたが、後円部東側濠底で葺石を葺いた斜面が存在した。この施設は、SEトレンチの北で最下段を屈曲させ、濠底を横断するようにして周濠の外側裾まで伸びているようである。この斜面の規模は、幅約1m、高さ約0.5mで、長さは確認長4m、直径5cm程度の礫が葺かれている。

#### 4. 墳輪列

五色塚古墳には、墳頂、上段テラス、中段テラスの3段に、鰐付円筒埴輪や鰐付朝顔形埴輪が巡らされている。

上段テラスと中段テラスの埴輪列は、前方部と後円部が連続しながら墳丘を一周しているが、墳頂埴輪列は前方部ではコ字形に、後円部では円形に巡っている。墳頂埴輪列の内側は、方形の埴輪列の存在などを注意しながら調査を実施したが、特別な施設を見いだすことはできなかった。ただ、後円部墳頂で、小型で手捏ねの土師器壺や高壺などが出土している。

埴輪列に用いられる鰐付円筒埴輪や鰐付朝顔形埴輪は、墳丘に対し鱗は平行に、透孔は直交方向に、ほぼ例外なく樹立されている。普通円筒埴輪についても同様であるが、まれに透孔が墳丘に対し、平行に並べられるものも見られる(図4-13)。

埴輪は幅0.5~0.7m、深さ0.4~0.5mの溝状の掘形を設け、鱗と鱗が接するように、あるいは鱗が前後に重なるように並べられる。掘形内には、2~3層に土が埋め戻されており、埴輪の内側にもこれを固定する土が入れられている。なお、埴輪樹立後、埴輪掘形上も含めて、テラス全面に小礫混じりの砂質土が、「化粧土」として敷き詰められている、と観察されている。

##### (1) 前方部東側中段埴輪列(FE II、図4-14)

前方部先端部分約7.5mが削平によって失われているため、埴輪掘形の約70m、埴輪127本分の区間を検出し、取り上げた92本全ての埴輪の接合復元整理が完了している。

残存しているテラスの幅は約1m、検出レベルは後円部との接点では19.3m、前方部先

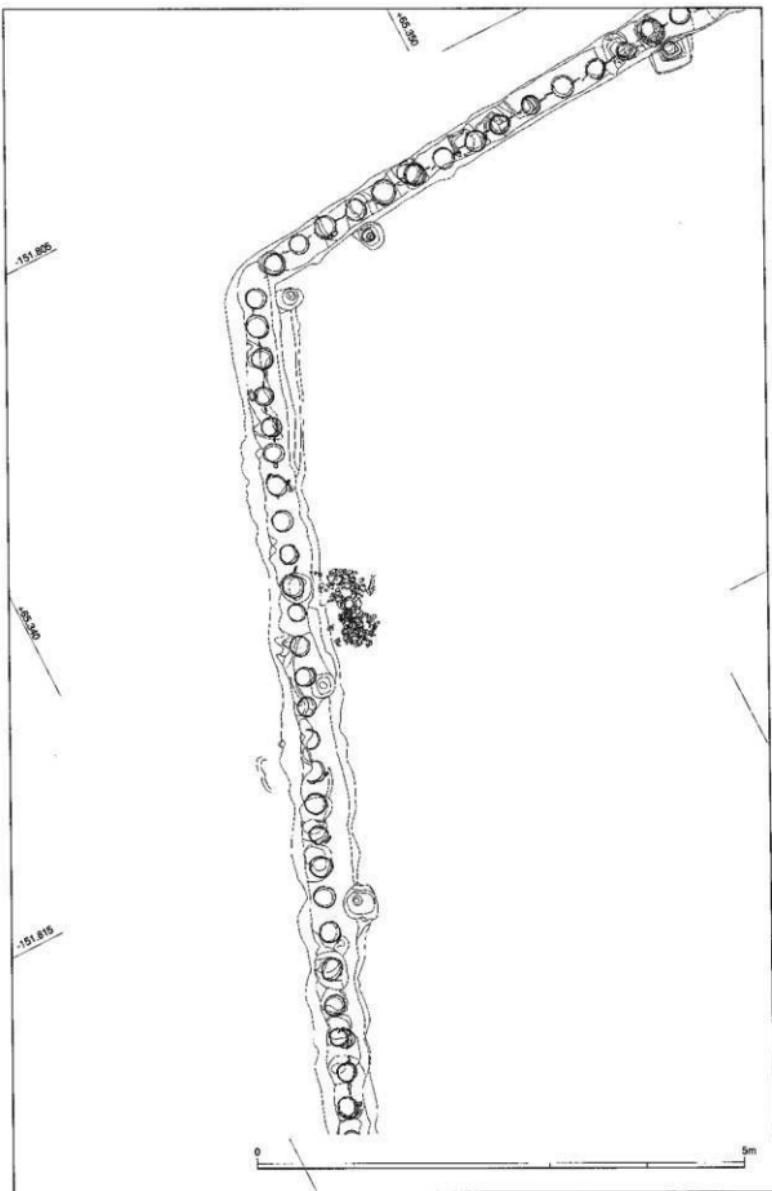


図4-13 東側くびれ部付近中段埴輪列出土状況平面図

端付近では19.1mとほぼ水平である。各埋輪の心々間の距離は0.5~0.7mで、基底石列から埋輪中心までの距離は、前方部側で0.4m、後円部側で0.7m、その中間付近では0.3mで、基底石列には平行であるが、埋輪埋設位置でちいさな出入りがある。

埋輪底部の樹立レベルは均一でなく、ある一定の間隔で高いものと低いものがある。ほとんどが一条目突帯付近までが掘形内に納まっている、つまり掘形上端と同一レベルであるが、深いものは掘形底をさらに掘削し、2条目突帯付近まで、逆に浅いものは底部の2/3付近までしか埋められていない場合もある。

この底部樹立レベルの違いは、埋輪の種別や規格の違いによると考えられ、朝顔形埋輪は高く、5条突帯6段構成の大型(L)規格の埋輪(第5章参照)が深く埋められる傾向が見られる。例えば、FE II 70、FE II 64、FE II 58は6本に1本の間隔で朝顔形埋輪が復元されていて、それぞれ周囲より約0.15m高い状態で検出されている。逆に、5条突帯の大型(L)規格であるFE II 130、FE II 111、FE II 110、FE II 99、FE II 53などは、周囲より約0.1~0.2m低い状態で検出されている。

この底部樹立レベルの規則性から、朝顔形埋輪は5~6本に1本の間隔で並べられていたと考えられる。また大型(L)規格の埋輪は、朝顔形埋輪の隣に配置される傾向もある。ただ、底部のレベルがほぼ水平の区間も認められたり、FE II 30・32・33・34・35・37のように大型(L)規格がまとまって樹立されていたりする部分も存在する。

以上のように、埋輪の樹立レベルは、埋輪の種別や規格により異なる高さや突帯、舗の位置などの調節を図ったと考えられる。

### (2) 前方部東側上段埋輪列(FE III、図4-15)

前方部先端部分約16.5mが削平によって失われているため、埋輪掘形の約63m、埋輪105本分の区間を検出した。後円部との接点から8~20mの間は削平により、埋輪は失れていた。61本が残存し取り上げられたが、接合復元整理を完了したのは、後円部側から6本のみで、残りの55本は未整埋である。

残存していたテラスの幅は約1m、検出レベルは後円部の接点から約6mまでは23.9~22.4mで急激に傾斜し、前方部側は22.8~23.0mとほぼ水平である。くびれ部付近の急傾斜は、続く後円部上段テラス・埋輪列との高低差を解消するため、前方部側とは1.5mのレベル差がある。

各埋輪の中心間の距離は0.5~0.6mで、舗が接するか重なる程度の間隔である。基底石列から埋輪中心までの距離は0.6~0.7mである。

埋輪底部の樹立レベルは、前方部側の54本分については、断面図から5本に1本の間隔でレベルの高い埋輪が認められる。未整埋ではあるものの、FE II と同様に、朝顔形埋輪である可能性が考えられる。後円部側の6本については、テラスの急激な傾斜のため、個々の埋輪の樹立レベルは、斜面に沿って階段状に変化させている。

### (3) 前方部東側頂埋輪列(FE IV)

前方部先端部分約22.5mが削平によって失われているため、埋輪掘形の約48m、埋輪85本分の区間を検出した。削平が著しく、ほとんどが埋輪底部が僅かに残されているのみで、復元整理作業を実施したのは後円部側から9本分のみである。

検出レベルは24.8m前後で、ほぼ水平である。各埋輪の中心間の距離は0.5~0.6mで、上段斜面の肩から1.5~2.0m程度内側で検出されている。

埴輪樹立後、比較的早い時期に埴輪の上半部が壊れたためか、FEIV1～4の埴輪内部には多くの破片が落ち込んだ状態で検出され、中には転落した葺石も含まれている。なお、後円部との接点であるFEIV1は朝顔形埴輪である。

#### (4) 前方部墳頂西側埴輪列 (FWIV、図4-16)

前方部先端部分約25mが削平によって失われているため、埴輪掘形の約44m、埴輪75本分の区間を検出した。削平が著しく、ほとんどが埴輪底部が僅かに残されているのみで、復元整理作業を実施したのは後円部側から7本分のみである。

検出レベルは25.0m前後で、ほぼ水平である。各埴輪の中心間の距離は0.5～0.6mで、上段斜面の肩から1.5～2.0m内側で検出されている。

FEIV同様、埴輪内部には多くの破片や葺石が落ち込んだ状態で出土している。なお後円部との接点であるFWIV1は朝顔形埴輪、その隣には大型規格の鱗付円筒埴輪が連続している。

#### (5) 東側くびれ部中段 (EくⅡ、図4-15)

東側中段の後円部と前方部との接点から後円部側にかけて約19m、33本分の埴輪列で、取り上げた31本全ての埴輪の接合復元整理が完了している。

残存するテラスの幅はおよそ1m、検出レベルは前方部との接点付近で19.3m、後円部側で19.5mとほぼ水平に見えるが、東トレンチでは20.5mであるため、徐々に高さを増しているようである。各埴輪の中心間の距離は0.5～0.7m、基底石列からの距離は0.6～0.7mである。

埴輪底部の樹立レベルに大きな高低差が認められ、大型品(5条突帯)の円筒埴輪が0.1～0.2m低く置かれ、2条目突帯付近までが掘形内に納まっている。一方、朝顔形埴輪に復元されるEくⅡ4は、周囲より約0.15m高い状態で出土している。樹立レベルの高いものは、ほぼ5～6本に1本の間隔で認められることから、朝顔形埴輪の可能性が考えられるが確定できない。また、前方部との接点に近いEくⅡ26～30の間では大型品(5条突帯)の円筒埴輪が連続して、低い位置に立て並べられている。

#### (6) 東側くびれ部上段 (EくⅢ、図4-15)

東側上段の後円部と前方部との接点から後円部側にかけて約18m、32本分の埴輪列で、取り上げた30本全ての埴輪の接合復元整理が完了した。

残存したテラスの幅は1～1.2m、検出レベルは23.9mで水平である。各埴輪の中心間の距離は0.5m、基底石からの距離は前方部との接点付近では0.6m、後円部側では0.8～0.9mである。

埴輪底部の樹立レベルはほぼ水平である。EくⅢでは、復元した埴輪の中に大型品(5条突帯)が含まれず、またほとんどの埴輪がAII類(第5章参照)に分類され、法量の描った埴輪が樹立されていたと推定される。

#### (7) 西側くびれ部上段 (WくⅢ、図4-15)

西側上段の後円部と前方部との接点から後円部側にかけて約17m、31本分の埴輪列で、取り上げた26本全ての埴輪の接合復元整理を完了した。

残存するテラスの幅は1mで、検出レベルは23.8～23.9mでほぼ水平である。各埴輪の中心間の距離は0.5～0.6m、基底石からの距離は0.5～0.6mである。

埴輪底部の樹立レベルはほぼ水平であるが、一定の間隔で高低差が認められる。樹立レ

前方部東側中段埴輪列(FEII)

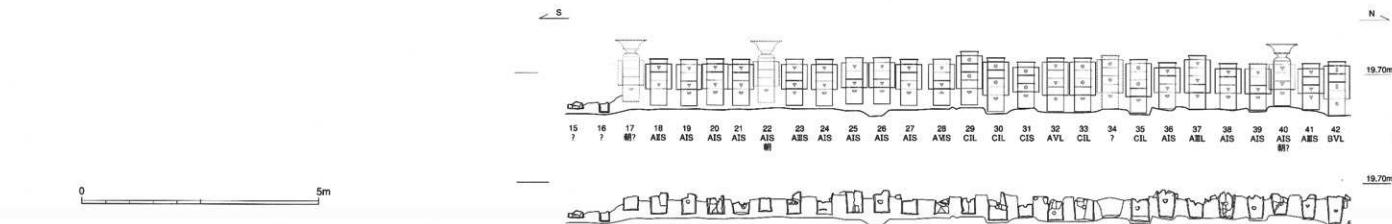
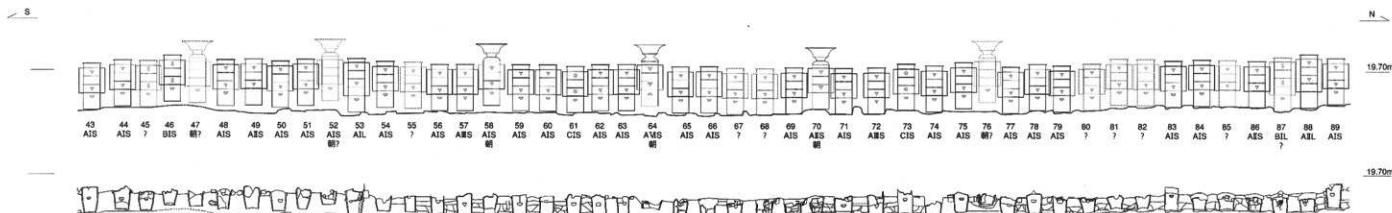
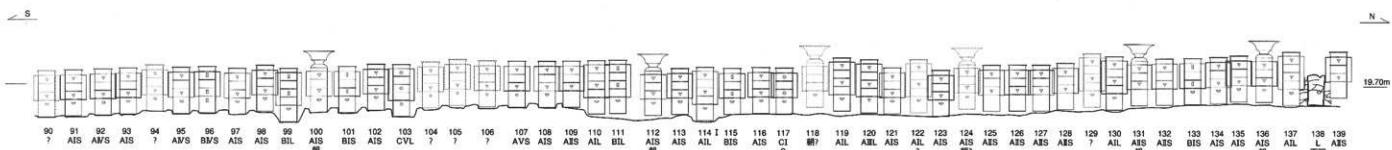
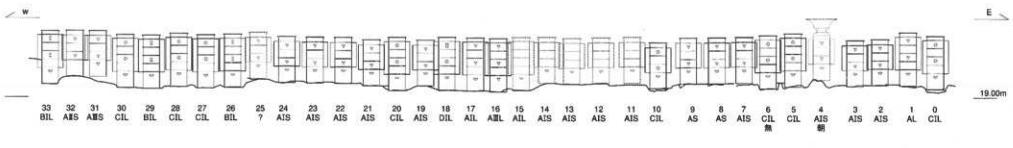
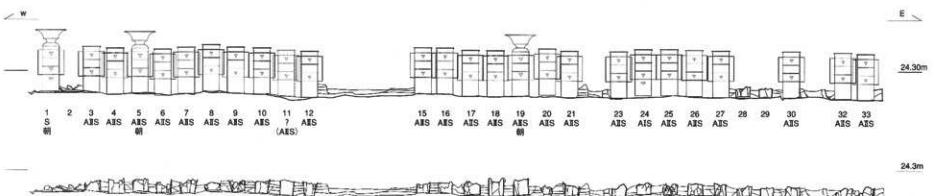


図4-14 墓輪列出土断面・立面図と埴輪列復元図(1)

### 東側くびれ部中段埴輪列(E<II)



### 東側くびれ部上段埴輪列(E<III)



### 西側くびれ部上段埴輪列(W<Ⅲ)

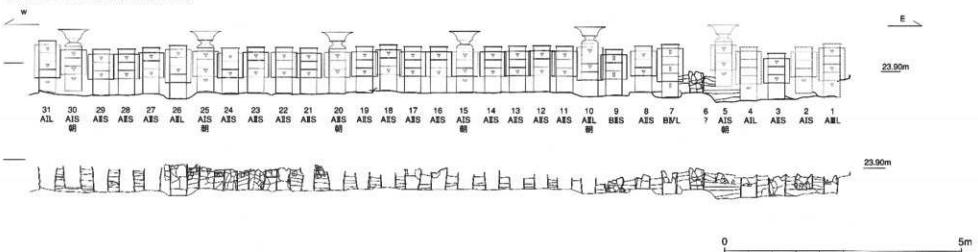
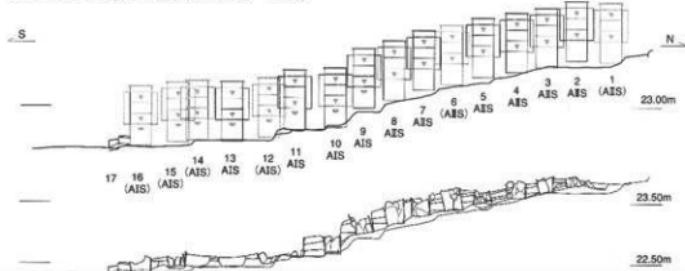


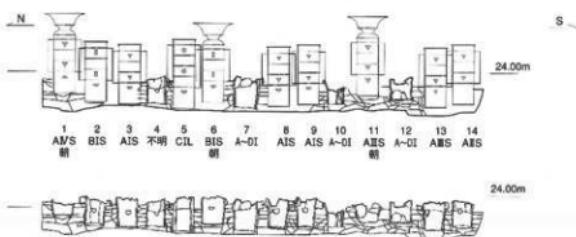
図4-15 墓輪列出土断面・立面図と墓輪列復元図(2)

4. 塙輪列

前方部東側上段埴輪列(くびれ部 FEIII)



後円部西トレーニチ上段埴輪列(BWIII)



前方部埴頂西側埴輪列(FWIV)

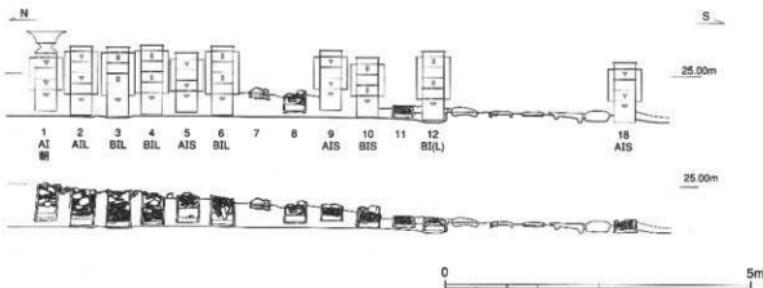


図4-16 墓輪列出土断面・立面図と埴輪列復元図(3)

ベルの高いWくⅢ10、15、20、25、30は朝顔形埴輪に、樹立レベルの低いWくⅢ7、26、31は大型品（5条突帯）に復元された。ここでは、ほぼ5本に1本の間隔で朝顔形埴輪が樹立され、規則的な埴輪配列がなされていたと考えられる。なお、WくⅢ31は樹立時に底部を打ち欠いて高さを調節している。なお、打ち欠かれた底部の破片の一部が、付近の掘形内から出土している。

五色塚古墳の円筒埴輪列は、大部分で10mに18本の割合で樹立されており、墳丘全体では約2200本の埴輪が巡らされていたと推定されている。

小壺古墳では、埴輪は墳頂と中段テラスの2段に巡らされ、鱗付円筒埴輪、鱗付朝顔形埴輪と家形埴輪が発見されている。埴輪の樹立方法も五色塚古墳と同様で、溝状の掘形に樹立されている。小壺古墳でも五色塚古墳と同様の間隔で埴輪が巡らされていたとすれば、総数約320本と推定されている。

なお、前方部東側中段から後円部にかけて、埴輪掘形に接して掘立柱建物の柱穴に類似する遺構が存在する（図4-17）。この遺構は円形に近い掘形で、掘形内にも円形に土質が変化している部分があり、柱状のものが建てられていたのではないかと推定されている。

この遺構は、東側中段以外では全く検出されていないが、西側ではそれに注意していないかったことと、検出していたが不明遺構として記録していなかったとする記録があり、西側にも存在していた可能性が残される。隣接する柱穴の間隔は、くびれ部の角で1.6m、それ以外では5.3～9.9mであるが、多くは5.5m前後である。掘形の直径は、40～80cm、深さは墳丘検出面から55～85cmである。柱状の土の変化の直径は、15～25cmである。中には掘形と柱状の穴の間に上・中段の葺石と同質の石を入れて、柱状のものを固定していたと推定されるものもある（図版35-3）。この遺構が柱穴かどうかの確定は困難であるが、掘立柱建物遺構の柱穴と全く異なる点は見いだせないことから、柱穴と考えておきたい。

## 5. 周辺部の範囲確認調査

五色塚古墳周辺の史跡指定地外では、これまでに十数次にわたり発掘調査が実施されてきた（表4-1・図4-18・19）。ここで記述する内容は、それら調査を担当した調査員の報告を集約し、その後判明した事実等を加筆したものである。

五色塚古墳本体の調査完了後、後円部北方に接する市営五色山住宅の建て替えに伴う試掘調査（昭和57年度・第2次調査）で、周濠の外側に埴輪列を伴う外堤と周溝が検出され、古墳の外縁施設の存在が初めて明らかになった。

この結果を受けて、昭和59年度の調査（第4次調査）では、外堤の埴輪列だけでなく、五色塚古墳、小壺古墳の周濠などが検出された。その後、事業主体者（当時神戸市住宅局）との協議を重ねた結果、市営住宅の建て替えは行わず、教育委員会が用地を取得し、史跡公園化することで合意した。そして、その計画に向け三年計画で用地の取得が開始されたが、社会情勢の変化によって、計画半ばで頓挫し、現状維持のまま現在に至っている。

一方、古墳の東側に接する旧舞子病院跡地は広大な敷地で、五色塚古墳と一緒に公園化を目指し、神戸市と土地所有者の間で用地取得交渉が行われたが、金額面で成立せず、集合住宅が建設されることになった。これに伴う遺跡存否確認調査（昭和59年度・第3次調査）で、北方の第2次調査と同様に、周濠の外側を巡る周溝の存在が確認され、病院建



図4-17 前方部東側中段および後円部中段の柱穴

調査次数	調査期間	調査面積	調査担当者	調査原因	出土遺構など	備考
第2次	19830222～19830331	150m <sup>2</sup>	西岡巧次	市営住宅立替	五色塚古墳周溝・埴輪列	保存
第3次	19841002～19841020	100m <sup>2</sup>	宮本都雄	集合住宅建設	五色塚古墳周溝	保存
第4次	19850110～19850331	1900m <sup>2</sup>	渡辺伸行・森田松	市営住宅立替	五色塚古墳周溝・埴輪・小壺古墳周溝	保存
第5次	19851216～19860213	970m <sup>2</sup>	渡辺伸行	集合住宅建設	五色塚古墳周溝	保存
第6次	19860808～19860827	200m <sup>2</sup>	西岡巧次	集合住宅建設	五色塚古墳周溝	保存
第7次	19860930～19861013	240m <sup>2</sup>	丸山謙・西岡巧次	集合住宅建設	古墳周溝？	消滅
第8次	19861106～19870520	3316m <sup>2</sup>	民間調査組織	集合住宅建設	近設墓	消滅
第9次	19870706～19870716	30m <sup>2</sup>	前田伸久	集合住宅建設	五色塚古墳周溝	保存
第10次	19880125～19880202	100m <sup>2</sup>	丹治康明	公園建設	五色塚古墳周溝・周濠	保存
第11次	19880417～19880420	40m <sup>2</sup>	山本雅和	集合住宅建設	五色塚古墳周溝・周濠	保存
欠番	19910301～19910331	560m <sup>2</sup>	丹治康明	範囲確認	土坑	保存
第12次	19930823～19931110	1000m <sup>2</sup>	丹治康明	範囲確認	古墳時代溝	保存

表4-1 周辺範囲確認調査履歴

物撤去の状況に合わせて、数回の調査（第5～8次調査）が実施された。このうち、周溝が確認された一部の調査区については、盛土による保存がなされている。また、その後の調査（第10～11次調査）では、五色塚古墳本体の周濠の肩部が確認され、その一部は保存区域になっている。

以上のように、昭和57年度以降の周辺の発掘調査では、主として古墳の外縁施設に関して多くの成果をあげてきた。以下、これまでの周辺の調査の概要を記述するが、五色塚古墳、小壺古墳との関連が深いと考えられる時期の造構（トレンチ）を中心に報告する。

なお、五色塚古墳の本体調査と並行して、前方部南東で昭和49年度に共同住宅建設敷地部分の調査が実施されたが、古墳と関連のある造構は全く検出されていない。また、昭和52年度の五色塚古墳史跡指定地内南東隅の調査では、古墳に向かって傾斜する落ち込みが、トレンチ内で線状に検出されている。

#### (1) 第2次調査（昭和57年度）

神戸市営北五色山、西五色山住宅の建て替えに伴う範囲確認調査で、五色塚古墳、小壺古墳の外縁施設の確認を目的に12か所のトレンチを設定し調査を実施した。

##### Aトレンチ

トレンチ南端から約1mで、小壺古墳周濠外側の立ち上がりと考えられる南に向かう落

ち込みが確認された。落ち込みの下部には葺石状の小石が見られる。また、トレンチ中央北寄りで幅5m、深さ0.7mの溝が検出されている。

#### Bトレンチ

トレンチ南端から約1.5mで、小壺古墳周濠外側の立ち上がりと考えられる、南に向かう落ち込みが確認されている。落ち込みの深さは0.4mで、下部の平坦面には5cm大の礫が敷かれた状態で見つかっている。また、トレンチ中央では幅5m、深さ0.7mの溝が確認されている。

#### D1トレンチ

小壺古墳の墳丘裾と周濠が検出されている。周濠の立ち上がりは搅乱のため確認できないが、推定上部幅5m、底部幅1.6m、深さ0.6mで、外側へゆるやかに立ち上がる。墳丘斜面には原位置を保っていない5cm大の礫が見られる。

#### Eトレンチ

小壺古墳の墳丘裾と周濠が検出されている。周濠の上部幅は3m、底部幅1.4m、深さは中央で0.6mで、外側へゆるやかに立ち上がる。埋土には埴輪片を含み、墳丘側からの堆積と考えられる。墳丘斜面は、約35度の傾斜角を測る。また、墳丘斜面にはD1トレンチと同様に原位置を保たない5cm大の礫が見られる。

#### G2トレンチ

トレンチ南端から8mで、幅3.1m、深さ0.5mの断面U字状の溝を検出した。溝内堆積土から結晶片岩及び円筒埴輪片が出土している。溝の南側には、五色塚古墳の外堤と考えられる盛土がみられ、その幅は7m以上と推定される。

#### G3トレンチ

表土直下で原位置を保つ円筒埴輪基部(実測図番号242)を確認した。また、この埴輪の西1.5mで円筒埴輪の抜き取り痕跡と考えられる円形の掘形を検出した。これらは、五色塚古墳外堤の埴輪列の一部と考えられる。

### (2) 第3次調査(昭和59年度)

旧舞子病院敷地内の遺跡存否確認調査である。五色塚古墳の外部周溝の一部と考えられる溝が確認された。

### (3) 第4次調査(昭和59年度)

神戸市営五色山住宅の建て替えに伴う試掘調査(第2次調査)の結果を受け、小壺古墳の周濠の規模や五色塚古墳外堤埴輪列、五色塚古墳外部周溝の形状や性格を調査する目的で、14カ所のトレンチ調査を実施した。

#### 6トレンチ

五色塚古墳外部周溝を検出した。周溝の幅は2~2.5m、深さは0.2~0.55mである。周溝は7トレンチより西へ向かって徐々に傾斜し、10トレンチ、11トレンチを経て、6トレンチから9トレンチの間で北西に折れまがり、小壺古墳の周濠にとりつくと考えられる。五色塚古墳の周濠との距離は、8~12mである。周濠の外側に埴輪が立っていたと考えられ、埴輪の小片や埴輪の抜き取り穴と思われる径0.6mのピットが2か所検出されている。

周溝内堆積土からは、土師器や結晶片岩、埴輪、中世陶器などが出土している。周溝底

に径0.8m、深さ0.15mの炭の入った円形の土壙が存在した。土壙内から土師器小片が出土している。溝底に0.2~0.3mの土が堆積した後（6世紀後半以降か）、結晶片岩が敷き詰められている。結晶片岩は、周溝内で長さ10m、幅1.5mの範囲に敷かれているが、トレンチ中央より西側の密度が高い。なお、結晶片岩に混じって川原石もみられる。

また、10トレンチで検出された周溝内からは、意図的に破碎されたと考えられる須恵器甕（実測図番号414）が出土している。

#### 8トレンチ

小壺古墳周濠外側の立ち上がりを検出した。周濠は9トレンチに向かってやや折れ曲がる。その北側には幅3~5mの溝が確認されている。

#### 9トレンチ

小壺古墳の周濠と、五色塚古墳の外部周溝を検出した。

小壺古墳の周濠は、古墳の北側から東側にかけてやや折れ曲がり、さらに東へ行くに従って外へ開き、五色塚古墳の周濠と接続していると考えられる。周濠は、北側で幅2m、深さ1.1m、東側で幅10m、深さ1.5mを測り、濠底は西から東へ傾斜している。周濠内からは、埴輪や須恵器片、結晶片岩などが出土している。

また、周濠内で陸橋が確認された。陸橋は撥形で、疊層の地山を掘り残し、南側は、一部盛土してつくられている。上部幅は外堤側で5.5m、古墳側で3m、底部幅は外堤側6.5m、古墳側4.5m、高さ0.8mである。

五色塚古墳の外部周溝は、9トレンチで大きく弧を描き、小壺古墳の周濠にとりつくと考えられる。

なお、外部周溝の外側では、上坑や溝状遺構がわずかに検出されたのみで、遺構は極めて希薄である。

#### (4) 第5次調査（昭和60年度）

旧舞子病院敷地内の遺跡存否確認調査（3次調査）の結果、五色塚古墳後円部北東でも、外部周溝の巡ることが明らかになった。この周溝の調査と、病院建物撤去後の遺跡の範囲確認のため、14本のトレンチ調査を実施した。しかし、調査区南側の広大な敷地には五色塚古墳と関連する遺構は、全く検出されず、近世の土坑墓群が出土したのみである。

#### 5トレンチ

幅1.6~1.9m、深さ0.8mの溝状遺構を検出した。溝内からは埴輪片が出土しており、五色塚古墳と同時期の遺構と考えられる。

#### 11トレンチ

五色塚古墳周濠に沿って巡る、外部周溝を確認した。周溝の西側肩は検出されていないが、幅約6m、深さ0.3mを測る。周溝は南へ向かって徐々に浅くなり、トレンチ北端と南端の周溝底のレベル差は、0.3mである。周溝底からは、円筒埴輪（実測図番号243）、朝顔形埴輪、蓋形埴輪、盾形埴輪、楕形埴輪などの破片が出土しており、本体北方の市営住宅跡地と同様、周濠と周溝の間に埴輪が巡らされていた可能性が高い。なお、11トレンチの南に設けられた10トレンチでは、削平のため周溝は検出されなかった。

#### 13トレンチ

幅約4m、深さ1mの溝状遺構を検出した。溝内堆積土からは、埴輪片が出土しており、

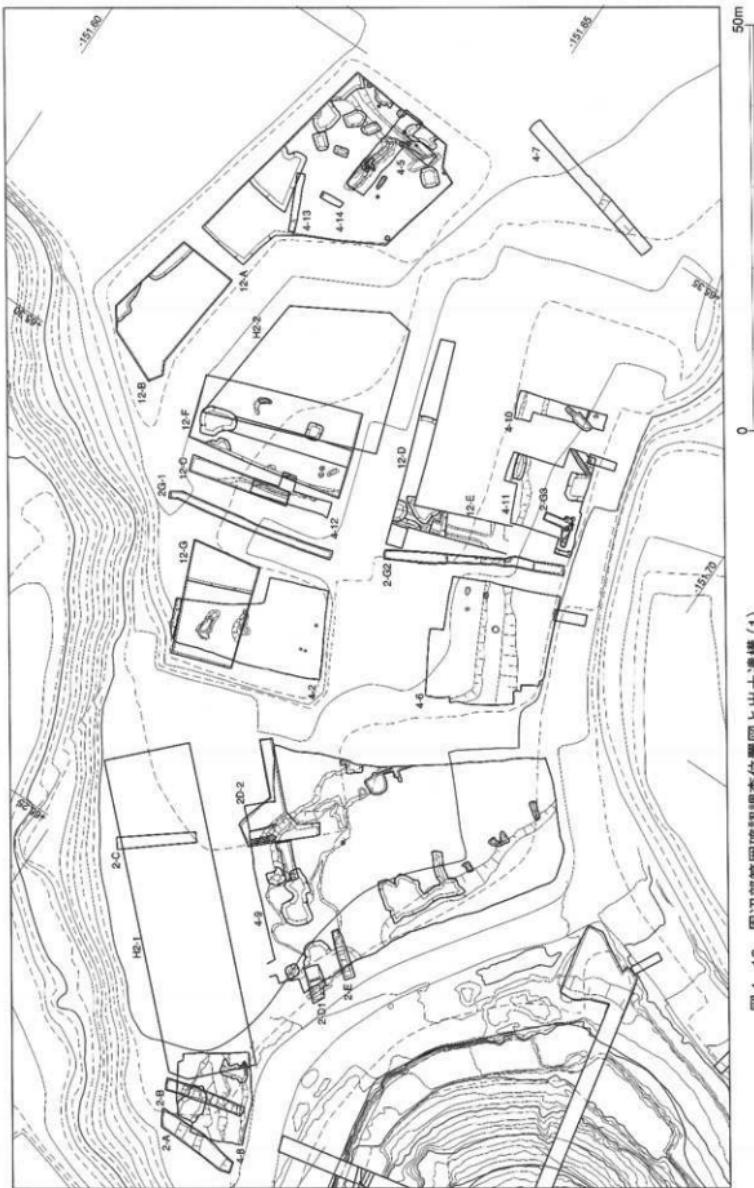


図 4-18 周辺部施設確認調査位置図と出土遺物(1)

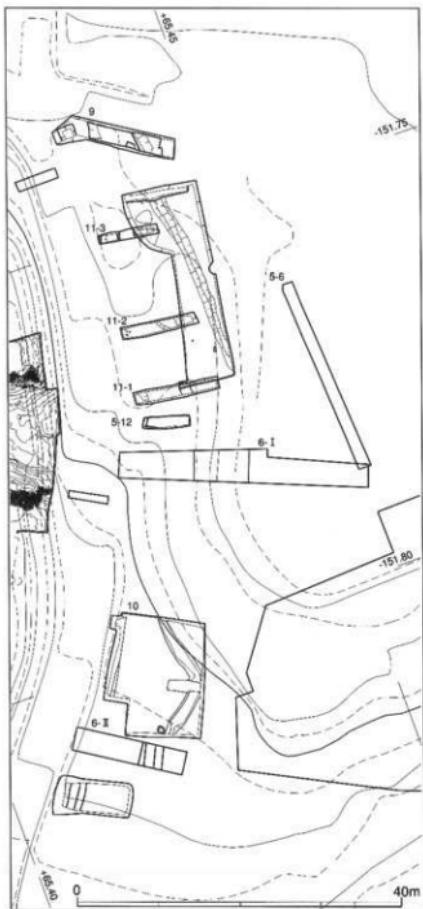


図4-19 周辺部範囲確認調査位置図と出土遺構(2)

した。2トレンチで検出した溝とは方向が大きく異なる。埋土は2トレンチの溝と同様である。

### 5トレンチ

2・3トレンチで検出した溝の連続性をとらえるために設定したトレンチで、溝は2トレンチと同一方向で検出された。その幅0.13m前後、深さ0.2~0.4mである。埋土中から40数点の埴輪片が出土した。溝の直上に堆積する土層からは、室町時代に属すると思われる土器器壠、備前焼鉢が出土している。

これらの溝は、第5次調査で確認された溝と連続すると考えられ、または直角方向に

五色塚古墳と同時期の遺構と考えられる。

### (5) 第6次調査(昭和61年度)

旧舞子病院敷地内での病院建物撤去後、五色塚古墳の範囲確認を目的に3カ所のトレンチ調査を実施した。

#### Iトレンチ

3次調査で設定したトレンチの再確認である。周溝を再検出し、測量を行ない敷地内における位置を確認した。

#### IIトレンチ

トレンチ中央部に幅6.3m、深さ東側で0.9m、西側で0.15~0.25m前後を測る、断面U字状の溝を検出した。I・IIトレンチで検出した溝は、第5次調査の11トレンチで検出した周溝に続くものと考えられ、古墳の外部周溝の一部であろう。

### (6) 第7次調査(昭和61年度)

旧舞子病院敷地内での病院建物撤去後の遺跡の範囲確認のため、そして第5次調査で確認された埴輪を含む溝の方向の確認を目的として、5カ所のトレンチ調査を実施した。

#### 2トレンチ

幅0.5~0.6m、深さ0.6mの断面U字形の溝を検出した。埋土中から埴輪片・土錐が出土している。

#### 3トレンチ

幅0.12m前後、深さ0.4mの溝を検出

屈曲することが確認された。溝の底面レベルは、2トレンチから3トレンチに向けて徐々に上がっており、その差は約0.6mを測る。埋土中から出土した埴輪は、大部分が円筒埴輪で、若干の形象埴輪が混じる。円筒埴輪は五色塚古墳出土のものと酷似していることから、同時期の遺構と考えられる。

#### (7) 第8次調査(昭和61年度)

旧舞子病院敷地内での病院建物撤去後の遺跡調査である。広大な調査面積であったが、五色塚古墳に関連する遺構は全く検出されず、約800基を数える近世墓が調査された。

#### (8) 第9次調査(昭和62年度)

旧舞子病院敷地内での共同住宅建設に伴う道路の拡幅工事で、遺構に影響が及ぶと予想される周溝部分の調査である。

周溝は地山を切り込んで掘削され、幅約6.5m、深さ約0.3mを測り、五色塚古墳周濠に沿うように確認された。周溝の埋土上層には埴輪片、土師器片を多量に含むが、下層ではそれらの遺物をほとんど含まず、円碟を多量に含む。出土埴輪は円筒埴輪のみで、形象埴輪は出土していない。周溝上面において玉縁状の口縁を有する白磁片や須恵器梶の口縁部が出土しており、この周溝が鎌倉時代にはすでに埋没していたことを示している。

なお、検出した周溝は、調査終了後真砂土で埋め戻しを行い、地下に保存されている。

#### (9) 第10次調査(昭和63年度)

五色塚古墳の外部周溝を検出した部分に公園が設置されることに伴い、遺構の遺存状況を確認するための調査である。

五色塚古墳の外部周溝と、周濠外側の立ち上がりを確認した。

周溝は、調査区の中央付近で東側に突出し、くの字状を呈する。上部はかなり削平を受けており、深さは0.15m以内、幅1.7mを測る。削平の結果、周溝の最も深い部分のみが残され、くの字状の溝として検出されているものと考えられる。

調査区の西隅の五色塚古墳に向かって急激に落ち込む遺構は、古墳に沿う形で確認されていて、五色塚古墳の周濠東側肩部と考えられる。

#### (10) 第11次調査(平成元年度)

五色塚古墳後円部北東側の外部周溝の位置や、その規模を明確にするための調査である。調査区は、第5次調査の11トレンチと一部重複する地点で、保存区域になっている。第5次調査では既存建物があったため、周溝の東側肩部から最深部を検出したに留まっており、この部分で周溝の西側肩部を検出するため、3カ所のトレンチを設定した。

なお、今回の調査で設定したトレンチは、すべて調査終了後、遺構面上に厚さ30cmの真砂土を入れ、保護・保存を図った。

##### 1トレンチ

搅乱が著しいため、周溝は確認できなかったが、トレンチ西端部で西側へ急傾斜する落ち込みを確認した。この落ち込みは、五色塚古墳の周濠東側肩部の可能性が高い。

## 2 トレンチ

トレンチ東端から1.9mの地点で、周溝西側肩が確認できた。第5次調査の成果を含めて復元すると、幅6.5m、深さ0.3mである。

また、この周溝西側肩部から約2mの平坦面があり、ここから緩やかな傾斜で基盤層が西へ下がっている。トレンチの西端約1mの部分では、基盤層から約10cm浮いた状態で、鰐付円筒埴輪片を10点確認した。これらの埴輪は、掘形が確認できていないが、出土状態からみて、周溝と周濠の間の平坦面に樹立されていたものと考えられる。

出土した円筒埴輪（実測図番号219）は五色塚古墳出土のものと酷似している。

## 3 トレンチ

トレンチ東端から2.2mの地点で、周溝西側肩が確認できた。5次調査の成果を含めて復元すると、幅約6.0m、深さ0.3mである。

### (11) 平成2年度調査（調査次数なし）

五色塚古墳北側の外縁施設の有無やその広がり、性格などを確認するため、2カ所のトレンチ調査を実施した。

五色塚古墳、小壺古墳の隣接地にも関わらず、古墳時代の可能性が考えられる土坑を2基検出したのみである。市営住宅建設による搅乱で、すでに遺構の多くが消滅した可能性も考えられるが、埴輪や土器などの出土も全く確認されなかつたことを考慮すると、今回の調査区域付近は、当初より遺構の分布の希薄な地域であった可能性が高い。

### (12) 第12次調査（平成5年度）

五色塚古墳北側周濠の外側の状況を把握し、今後の利用計画に盛り込むため、トレンチ調査を実施した。

#### C トレンチ

トレンチの東側で南北方面の溝が検出されたため、トレンチの一部を東側に拡張し、溝の幅を確認したところ、幅約1.2m、深さ0.2mで、トレンチの中央付近で広がって終わるものと推定される。

#### D トレンチ

トレンチの西側で、Cトレンチで検出した溝の続きを確認した。

#### E トレンチ

C、Dトレンチで検出した溝と、五色塚古墳外部周溝との関係を明らかにするために設定したトレンチである。五色塚古墳外部周溝の一部と、これに直角方向に接続する溝を確認した。両者には、検出状況及び土層断面の観察などにより切り合い関係は存在せず、同時に存在した可能性が推定される。また、埴輪や結晶片岩片がまとまって出土した。

なお、五色塚古墳外部周溝に直交して北側に延びる溝を除くと、周溝の外側の遺構の分布はほとんどない。

### (13) その他

試掘調査や立ち会い調査などの際に、五色塚古墳、小壺古墳との関連が考えられる遺構が検出された。

小壺古墳の北西にある個人住宅の建て替えに伴う調査で、小壺古墳周濠と考えられる遺構が確認されている。調査地は確認できるが、遺構の詳細などは不明である。

旧舞子病院敷地内の共同住宅建設に伴う立ち会い調査では、五色塚古墳の周濠の立ち上がりが確認されている。この調査区で確認された周濠が、これまで検出された最も南にあたる。周濠は検出面から急傾斜で西へ向かって落ち込んでいる。

また平成14年度に、五色塚古墳のくびれ部西側、小壺古墳の南西側で行われた試掘調査では、周濠の一部と考えられる落ち込みが確認されている。

## 6. 小結

以上のように、昭和57年度以降の周辺調査で、主として古墳の外縁施設に関わる多くのことが明らかになった。

第一は五色塚古墳周濠に併行して周溝が巡ることが判明した点である。北西側では、検出長約100m、幅3~5m、深さ0.2~0.55mで、やや屈曲しながら小壺古墳の周濠にとりつくと考えられる。周溝の埋土からは埴輪のほか、結晶片岩や6世紀代の須恵器、中世陶器などが出土している。五色塚古墳周濠外縁との距離はおよそ10mで、外堤上には円筒埴輪が立て並べられていたと考えられる。その樹立間隔は確認できた部分では1.5m程度で、古墳本体の各段や埴輪部に樹立されていた間隔に比べてはるかに広く、埴輪も直径の大きなもの（実測図番号242）が使用されている。

北東側では、検出長約80m、幅2~6.5m、深さ0.15~0.3mで、南に向かって狭く、浅くなり、途中で屈曲する部分も見られる。溝の埋土からは、円筒埴輪や各種形象埴輪などが出土している。五色塚古墳周濠外縁との距離は10m程度であるが、南になると5m前後になると考えられる部分も存在する。北西側に比べ周溝の幅は狭いが、外堤上には同様に埴輪が樹立されていたと推定される。円筒埴輪は、実測図番号243のように直径の大きなものが見られる。また、鞍形埴輪や盾形埴輪などの形象埴輪は、第5次調査の11トレンチで多く出土している。このトレンチはNEマウンドに隣接する部分で、その位置から古墳祭祀との関連性も推測される。

なお、五色塚古墳本体の調査では、蓋形埴輪を除くと数点の盾形埴輪が採集されているのみで、形象埴輪の出土は極めて少なく、また直径の大きな大型の円筒埴輪は一点も確認されていない。

五色塚古墳の周濠の外側上端は、後円部北西側の調査では検出されていないことから、その立ち上がりは現在の道路下または道路境界にあたると考えられ、埴丘裾から肩部までは18~20mと推定される。

北東側では、第10・11次調査などで、立ち上がりが検出されている。周濠の検出長約5m、埴丘裾から肩部までは15~20mと推定される。

ただし、くびれ部から前方部にかけての周濠については、確認ができていないので、不明な点が多い。地形的に南に向かって低くなることや、外部周溝が南に向かうに従い、浅く不鮮明になることから、南に向かって収束する形状をとる可能性も考えられたが、本章の3.周濠で記したように、おそらく南側にも周濠は存在すると考えられる。

五色塚古墳後円部北西側の調査では、外部周溝に直交する検出長30m前後、幅約1.5mの溝が検出されている。この溝は外部周溝と同時期と考えられており、五色塚古墳の範囲が

広範に及ぶことが明らかになった。しかし、この溝以外は、土坑や溝状遺構が数基確認されるのみで、遺構は希薄である。

北東側では、外部周溝からおよそ90mはなれた地点で、検出長20mでほぼ直角に屈曲する溝が確認されている。五色塚古墳の埴輪と酷似する埴輪片が出土していることから、同時期の遺構と考えられ、周辺に存在したと伝えられる古墳と関連する遺構の可能性が考えられる。なお、これより南側については、五色塚古墳と関連する遺構は検出されず、多数の近世墓が検出されているのみである。

小壺古墳の北～北東側にかけて、周濠が確認されている。周濠は西側にも巡ることが確認されているが、南側の状況は全く不明である。周濠は東側で大きく外側に開き、五色塚古墳周濠に接続すると考えられる。ただし、濠底東端の標高は17.2mで、五色塚古墳周濠底より2m程度高く、その接続状況については不明な点が多い。また、墳丘北側の周濠で、墳丘と外部を接続するように陸橋の存在が確認されているが、その機能・目的は明らかではない。